



卓 話



「祈りの国チベットの 過去と現在を知る」

早稲田大学総合科学学術院教授 石濱 裕美子氏

七世紀、ソンツェンガムポ王（-649）の時代にチベットは歴史の舞台に姿を現す。チベットの年代記によると、ソンツェンガムポ王は中国とネパールから妃を迎えて仏教を導入し、現在チョカン（釈迦堂）として知られる大寺を建立した。ラサはこのチョカンを中心に栄え、それからも代々の為政者は仏教の護持者が自身が実践者という仏教国家を形成した。一七世紀、チベットの最高権威者となったダライラマ五世は、ソンツェンガムポ王の再来と崇められ、ラサ郊外の丘の上にある同王の宮殿跡に1647年、壮麗な宮殿を築いた。これが「東洋の法王庁」として知られる有名なポタラ宮である。



ダライラマの権威は遠くモンゴル、満洲、ネパールなどにまで及んだ。18世紀初頭チベットを訪れたカプチン派の宣教師デジデリ（1684-1733）は、ダライラマの権威を以下のように記している。「チベットの神聖政治は、非宗教的なものではなく、すべての俗権や通常政治の上にある。チベットの大ラマ（ダライラマ）はすべての長であり、チベットの無学で迷信的な人々のローマ教皇のようなものであり、他のあらゆる高僧の長でもある。・・・チベットの大ラマはチベット人ばかりか、ネパール人、モンゴル人、中国人によっても認められ尊敬されている。そして彼らの首長、主、保護者、大司教とみなされている。彼は常人としてではなく彼らを保護し利するために転生を繰り返してきた観音菩薩として崇められ、供養されている。彼は宗教的な事柄のみならず世俗的な事柄についても支配を行なっている。なぜならば全チベットの絶対的な君主であるからである。」（『チベットの報告』）

このダライラマの勢威に対して、当時中国を征服していた満洲人王朝の清朝は最大限の敬意を払い、ある時は純粋な信仰心から、ある時は防衛上の理由からダライラマ政権の護持に努めた。満洲人は自らに比べ圧倒的多数の漢人を安定的に治めるため、自分たちの国の周囲にいる民族との関係を大切に。具体的にはウイグル人、モンゴル人、チベット人の居住域に漢人が移住することを法令によって固く禁じ、諸民族の文化や社会が漢人の人口圧力に飲み込まれないようにした。しかし、十九世紀末に清朝が弱体化し始めると、漢人は次々とチベットに入植し始めた。そこで、清朝が倒壊した後、ダライラマ13世（1876-1933）は1913年、中国人をチベット領内から追い出し、国際社会に向けて仏教国チベットの発足を宣言し、国の近代化に着手した。しかし、1933年に十三世が遷化した後にその改革はうやむやとなり、全て旧態に戻された。この近代化の失敗は今に至るまで全てのチベット人の後悔の的となっている。

1949年、社会主義中国が建国し、1950年10月に「落後したチベットの封建社会を解放するため」、人民解放軍が東チベットに攻め込んできた。ダライラマ十四世はこの国難の最中、弱冠十五才にして政治のトップの座に就任した。翌年チベットは中国に合され、「宗教をアヘン」とする解放軍兵士は東チベットにおいて僧院を次々と破壊し、抵抗する僧侶や俗人を殺していった。チベットを占領した将軍たちには、かつての満洲皇帝のようなチベット仏教に対する畏怖はなかったのである。そして運命の1959年、中国軍からダライラマ14世のもとに儀礼ぬきで軍営に来ようにとの通達がある。この噂が流れると、「ダライラマが北京に連れていかれて、永遠にラサに戻ってこないのではないか」という不安がラサ市民の間に広がった。そのためダライラマが中国軍営に行く日となった3月10日、ダライラマの滞するノル布林カ離宮の周りには自然と多数のチベット人が集まり、離宮に入るものを阻んだ。群衆の数は日に日に増え、ダライラマと隔離された中国軍は殺気立っていき、とうとう最後通牒をつきつけてきた。「非道な仕打ちの数々をもって屈服を強いてきた外国人に対する民衆の怒りは頂点に達し、何物も彼らを後退させないところにまで追いやってしまった。人々は最後まで踏みとどまり、”大切な守護者”を護るため喜んで死んでゆくだろう」（『ダライ・ラマ自伝』）。

この時、ダライラマは自らを護るためにチベット人が犠牲にならないように亡命を決意したのである。ダライラマはインドに脱出し、ヒマーチャルプラデーシュ州のダラムサラに亡命政権を構えた。ここにおいてチベット人がダライラマを護るために自然に立ち上がった三月十日は「チベット人蜂起記念日」（Tibetan Uprising Day）に制定され、チベットの現状を世界に訴える日となった。今回の騒乱もこの三月十日のデモを警戒した中国当局と僧侶たちの衝突が契機になった。

観音菩薩の化身、ダライラマが去った後のチベットは、名実ともに中国に併合され、社会主義中国の元で数々の辛酸をなめることになる。中印国境紛争期（1959～1962）には、チベット人は兵士として徴用されその多くが死亡し、

観音菩薩の化身、ダライラマが去った後のチベットは、名実ともに中国に併合され、社会主義中国の元で数々の辛酸をなめることになる。中印国境紛争期（1959～1962）には、チベット人は兵士として徴用されその多くが死亡し、

観音菩薩の化身、ダライラマが去った後のチベットは、名実ともに中国に併合され、社会主義中国の元で数々の辛酸をなめることになる。中印国境紛争期（1959～1962）には、チベット人は兵士として徴用されその多くが死亡し、

銃後の者もまた負傷した中国兵のために輸血用血液の提供などを迫られた。文化大革命期(1966~1976)には元僧侶や元貴族は批闘集会でつるしあげられ、ダライラマを「僧衣を着た狼」として罵るよう強要された。庶民も信仰の自由はおろか、チベット服を着ることも許されず、名のある僧院はすべて学校などの社会施設に転用された。この間、主立った高僧の多くは亡命し、その後を追って大量の難民がインドやブータンやネパールに溢れ出た。

驚くべきことに、この最も厳しい時代にあってもダライラマは「中国人を恨んではならない」「敵が暴力をふるったからといって暴力で答えてはならない」「あなたの敵は中国人ではなく、自らの心の中にある怒りである」と、仏教徒としてのあり方をチベット人に説き続けた。それと同時にチベットの現状を訴えるべく、世界中をまわって支持を求め始めたのである。最初、十四世の言葉に耳を貸したのは反共的な団体ばかりだった。しかし、逆境にあっても損なわれないダライラマの高い倫理観に多くの西洋諸国の人々、中でもセレブリティが気づき始め、次第に心を奪われるようになっていった。やがて、様々な分野の有名人がダライラマの支持を公にし始めた。ビースティーボーイズ、レイジ・アゲインスト・ザマシンなどのトップアーティスト、リチャードギアなどの名優たち、チャールズ皇太子などは中国の強い非難をものともせず、チベット社会への援助を行い、ダライラマへの支持を表明していった。ハリウッドでのダライラマ支持はとくに著しく、アカデミー賞監督のマーチン・スコセッシンがダライラマの自伝映画「クンドウン」を、ジャンジャック・アノーも「セブン・イヤーズ・イン・チベット」で若き日のダライラマと西洋人との出会いを描き、そのいずれも、チベットの静謐な精神文明が唯物的で騒々しい社会主義政権に滅ぼされる悲劇と、その悲劇の中にあっても輝きを失わないダライラマの高潔さをテーマにした。ここ十数年、西洋世界において、ダライラマは、インド独立の父ガンディー、黒人の地位を向上させたキング牧師に並び称せられるまでになっており、チベット問題を平和的に解決することは、「真実は必ず勝つ」というテーゼの試金石とみなされている。現在、聖火リレーにおいて、人種・宗教の枠を超えて、フリー・チベット運動に人々が集った背景には実はこのような歴史があるのである。

話をチベット本土に戻そう。文革が公式に否定された八十年代に入ると、民族衣装の着用が許され、僧院の再建に許可がおりるようになった。しかし、西洋世界におけるダライラマ十四世の存在感が日々増していき、さらに、八十八年にラサ騷乱がおきると、中国政府のチベット政策はより強圧的なものとなっていく。僧院には警察が常駐し、僧侶に愛国教育を強制し、チベット社会で伝統的に行われていた幼児期の出家も義務教育の履行を理由に許可されず、僧院ごとにタイトな定員が課せられ、宗教活動には厳しい制限が加えられた。僧院の再建は許すが、宗教活動は制限を設けるこのような政策に対して、チベット人の多くは「観光客の目を楽ませるエキゾシズムのためだけに形式的に僧院の復興を認めている」と感じている。

チベット人居住域への漢人の流入は続き、2006年7月の青藏鉄道の開通はさらにチベットを「開発」することになった。チベットにおける観光ブームを期待した投資家たちは、競ってチベットに投資し、その結果ラサにはホテルや商店や食堂が乱立し、町並みは一変した。また、チベット人の仏壇にある仏像、仏具、はては生活用品のひしゃくに至るまでが、チベット人の家庭から二束三文で買い上げられて、鉄道に乗ってやってくる大量の観光客に売り込まれていった(外国人観光客の第一位は日本人)。

対話を訴えるダライラマと国際社会を無視し、このような同化政策をおしすすめていく中国政府に対して、チベット人の不満はここ数年臨界点に達していた。今回の騒乱はこのようなチベット人と中国政府との長年にわたる因縁が、五輪を契機に吹き出したものである。

現在、本土よりもれ聞こえてくるチベット内の情勢はいずれも暗いものばかりである。騒乱で怪我をして病院にいったチベット人が、みなどこかへ連れ去られてしまったため、怪我をしたチベット人も病院に行けなくなった、ラサのあちこちに検問所が設けられ、内地からやってきたチベット語のできない中国兵たちが、ささいなことを契機にチベット人たちを暴行している、中国政府は「お前たちが生きて、我らが死ぬか! 我らが生きてお前たちが死ぬか!」などのスローガンを叫ぶなど、およそ、ダライラマの望んだ中国人とチベット人の対話と調和の世界とはほど遠い状態である。

非力な少数者を、圧倒的な人口をもつ強大な軍事国家が制圧するという構図だけでも、十分心痛む話であるうえに、ましてそれがどのような目に遭おうとも、決してその相手を恨まず、対話を訴え続けているダライラマという指導者を戴くチベット民族の上に行われているということもあり、国境を越えた多くの良識ある人々が、それが他民族のことであろうとも、遠くで起きていることであろうとも、同じ人間として心を痛み、平和的解決を願っている。

チベット問題の平和的解決はすでに歴史の中に示されている。中国政府がかつての満洲皇帝が行ったように、中国がチベットの文化を認め、尊重することである。そのことにより、中国政府は真の意味での国際的評価と、自らの国の安定も手に入れることができるであろう(2008年『世界』六月号より転載)。

『レイプ・オブ・チベット』(晋遊舎)より

「中国人って子供みたいだ」2008年4月、長野での北京五輪聖火リレーを巡る「攻防」に参加したチベット人が言っていた。「お母さんがずっと護ってくれと信じている。お母さんの言ったことは絶対だと信じている。家から外に出て、他の人に何を言われても認めようとしなくて、泣くか怒るか、極端な反応しかできない。本当は怖がっているのだと思う。赤い旗以外の旗もあるということ、何歳になったら知るんだろう」「お母さん」とはもちろん母国、中国をたどったものだ。彼はインドで生まれ育った難民二世なので、生身の中国人とはほとんど話したことがなかった。今回のチベット動乱をきっかけに、日本に住む中国人と話す機会が増えた。そして彼らの「幼さ」に驚いたという。・・・